

滝沢家の内乱

カトケンが時代劇に挑戦!
笑って泣けるトタバタコメディ!

2011年、加藤健一プロデュース100本記念として初演された「滝沢家の内乱」。初演と同じく、滝沢馬琴を加藤健一、その息子に嫁いできたお路を加藤忍、声の出演で高畑淳子（馬琴の妻）と風間杜夫（息子・宗伯）が滝沢家の人々を演じます。年老いて視力を失っていく馬琴を支え、「南総里見八犬伝」脱稿まで導くお路の姿は、多くの女性客から共感を呼び、好評を博しました。

4年ぶりの再演となる今回は、7月23日の浜松公演からツアーがスタートし、東京公演を経て、9月5日（土）所沢ミュージズで千秋楽を迎えます。

カトケン版時代劇コメディをお見逃しなく！

9月5日（土）15:00開演

チケット/S ¥4,000 A ¥3,000
高校生以下 ¥2,500

*未就学児の入場はご遠慮ください。

☆ 加藤健一さん、加藤忍さんからメッセージをいただきました ☆

苦しい時、悲しい時、私は舞台芸術に支えられて今まで生きて来ました。私たちの作り出すお芝居が皆さんの生活に少しでも喜びを与えるものとなりますよう全身全霊を傾けて、この舞台を務めさせていただきます。劇場は豊かな人生を育む心の遊び場です。是非劇場にいらして下さい!! やいれ健一

人生最大の役〜!!
ごらんの飛躍に
ご期待ください♡ よ

●前回公演劇評●

加藤健一プロデュース100本記念
加藤健一事務所vol.79

滝沢家の内乱

作:吉永仁郎 演出:高瀬久男
出演:加藤健一 加藤忍
声の出演:風間杜夫(友情出演) 高畑淳子(友情出演)

2011年7月13日(水)~24日(日)下北沢・本多劇場



撮影:石川純

■東京新聞<夕刊>2011年7月19日(火)

加藤忍が明るく聡明な嫁好演

「南総里見八犬伝」の作者曲亭馬琴こと滝沢解は戯作の他に日々の暮らしを精細に記録した日記を遺している。それを基に「八犬伝」執筆当時の馬琴晩年の混乱した家庭生活に想像をめぐらせたのが、吉永仁郎作、高瀬久男演出のこの上演作だ。(中略)

嫁の長い外出に男との逢瀬を疑い小兒的な嫉妬心を燃やし、ささいな原因で激しい下痢を続けたあげく息を引き取る息子宗伯。病気の自分を差し置き、夫と嫁がむつまじくしているのを罵るお百。声で出演の風間杜夫と高畑淳子が滝沢家の異様な家族ぶりを表して舞台上緊張感をかもす。(中略)

若くして夫に先立たれてなお滝沢家に残り続けるお路の固い決意。その究極が終幕だ。老いて視力を失った馬琴が口述する「八犬伝」の結末を、漢字の書けないお路が気の遠くなるような作業のはてに執念で書きあげる。明るく聡明で気丈な嫁を加藤忍が好演していた。明晰で張りのある加藤健一のセリフ回しは、老いの表現には課題を残した。(抜粋)

江原吉博氏(演劇評論家)

■朝日新聞<夕刊>2011年7月21日(木)

文人・馬琴の生きざま活写

滝沢馬琴(加藤健一)の後半生を、息子の嫁たるお路(加藤忍)との二人芝居として描く。肉体的にも精神的にも正常ではない妻と、病弱で父より早世する息子が声のみ出演(高畑淳子と風間杜夫)というちょっと変わった味付けがほどこされている。

主宰者の加藤は、台本選びを一貫して行ってきた。まずいい戯曲ありきという考えだが、これは岸田国士が唱えた説、戯曲の善し悪しが舞台成果を根本的に左右するという論の実行そのものと言える。(中略)

馬琴との関係でお路の造形に曲折があつてしかるべきだが、加藤忍は第1幕がやや単調。しかし2幕では、「八犬伝」脱稿の場で説得力を持った。ここは師匠・健一への思いも重なって見える。加藤健一は俳優としての風格さえ備えはじめ、一筋縄ではいかない文人の生きざまを活写する。息の詰まるような日々の中での唯一の逃げ場、家人が寝た後の屋根の上での独白にも味がある。(抜粋)

大笹吉雄氏(演劇評論家)